口絵３　観音菩薩遊戯坐像　身体正面　静岡・乗光寺

口絵４　観音菩薩遊戯坐像　像底　静岡・乗光寺

口絵５　同　Ｘ線透過画像　側面

—調査報告—

静岡・乗光寺　観音菩薩遊戯坐像

岩田茂樹

はじめに

静岡県の最東部、駿東郡小山町生土に所在する乗光寺（臨済宗円覚寺派）は、応安五年（一三七二）に聯庵明聴を開山として、小田原城主大森頼明によって創建されたと伝える。[1] ここに取り上げる観音菩薩遊戯坐像は当寺本尊であり、滝見観音と呼ばれる。作者は東大寺大仏の鎌倉再興に携わった宋人鋳物師陳和卿というが、[2] むろん伝承の域を出ない。本像についてはすでに紹介がなされてはいるもの、[3] 中世にさかのぼる希少な遊戯坐像の作例として貴重と思われる。実査の依頼に対し同寺住職福山宗完師より特別に許諾をいただき、これを実施することができた。[4] 以下、調査報告を行う。

（一）像のデータ

本像は像高四九・八cm、[5] 髪際坐高二九・九cm、すなわち髪際で約一尺の坐像である。当寺本尊として須弥壇中央の厨子内に安置される。

まず形状を記す。

高髻を結う。地髪は全面に毛筋を表し、正面髪際中央および後頭部中央で左右に髪筋を振り分ける。鬢髪は一条が耳前に垂下し、さらにその前でもう一条が天冠台に巻きつくように結ばれる。天冠台は紐一条の上に列弁帯を表す。白毫を表す。耳孔貫通しない。耳朶は紐状で貫通する。鼻孔を浅く穿つ。顎の括りは見えない。三道を表す。胸の括りを一条表す（右のみ見える）。内衣を着け、左胸から腹にかけてその縁を表す。両肩を覆う覆肩衣を着け、右脇腹辺で袈裟

図１　観音菩薩遊戯坐像　顔正面　静岡・乗光寺

図3　同　右斜側面

図2　観音菩薩遊戯坐像　左斜側面　静岡・乗光寺

図5　同　右側面

図4　同　左側面

図 6　同　頭部正面

図 8　同　頭部右側面

図 7　同　頭部左側面

図９　観音菩薩遊戯坐像　Ｘ線透過画像　顔正面　静岡・乗光寺

にたくし込み、その部位に弛みを表す。左肩から袈裟を懸け、右腋下を通して腹前に回し、再度左肩に懸けて末端を背面に垂らす。袈裟は左胸脇で縁を一度折り返している。両脚を覆う裙を着ける。左腕は左体側やや後方に垂下、左腰脇で岩座に掌をあてがう。右手はゆるく前方に垂下、掌を右膝頭に置く。左脚を曲げ、右脚を垂下させ、岩座上に遊戯坐する。

つづいて品質形状について述べる。

ヒノキかと見られる針葉樹材を用いて彫成する。現状、頭髪を除いて全体に漆箔を施す。

頭・体の幹部は通して縦一材製。頭部は頭頂から両耳前を通り、顎下に達する線で面部を割り矧ぎ、玉眼を嵌入する。割首は行わない。像底より体部のみに深く内刳を施し、やや厚みのある蓋板を上げ底式に少し陥没させるように嵌める。左体側部は、肩以下、左袖先の地付に達する部位までを一材から造り、幹部材に矧ぐ。右体側部も、肩下がり以下、右腰脇部を含む部位に一材を矧ぐ。これら体側部は左右ともに上下各一本の鉄釘を打って幹部材に固定していることがX線透過撮影画像から判明するが、鉄釘はいずれも中途で切れているため、過去に両体側部を解体したことがあると認められる。両脚部は、両膝頭および右腕前膊半ばから先を含む部位に一材を矧ぐ。右膝頭の下方から裙の垂下部および右足先を含む部位に一材を矧ぎ、鉄鋏を正面から打って両脚部材に固定することがX線透過撮影画像から知られる。その他、宝髻、両手首先、左足先、右足指先をそれぞれ別材製とする。

保存状態は次のとおり。

右足指先がすべて亡失する。すべての漆箔、宝髻、両手首先、銅製装身具のすべて、像底の布貼りおよび紙貼り、光背、台座、厨子、以上後補。諸処に漆箔の浮き上がりが認められる。

X線透過撮影[6]の結果、本像には体部内に納入品のあることが判明した。

第一に、右胸辺から下腹部中央まで達する円筒形のもので、木製ないし紙製と見られる。内部にさらに何か納められているものと想像するが、詳細は定かではない。第二に、左腋付近に後ろ向きに納められた如来立像（印相は不明、台座をともなう）である。おそらく木造であろう。これらが造像当初のものか、それとも後世の追納品かは不明といわざるをえない。

（二）所　見

片手を台座（岩座）上につけ、片足を台座から垂下させる坐法を示す、いわゆる遊戯坐の像である。寺では滝見観音と呼ばれる。遊戯坐像は中国・宋代以降に流行するが、日本国内の遺品は、愛媛・鬼北町の等妙寺像（鎌倉時代）や山口・防府市の極楽寺像（南北朝～室町時代）[7]などわずかな例を除き、鎌倉やその周辺の東国地域に偏在する。本像を安置する乗光寺も駿河最東の地にあり、同様の文化圏に属するとみなしてよいだろう。一口に遊戯坐像といっても、台座に着く手や踏み下げる足が、左であったり右であったり、また片膝を立てるものや立てないものなど、像容は必ずしも一定しない。密教像のように厳密な儀規を持たないための事象であり、その形姿は願主や仏師の裁量にゆだねられる部分もあるかと推測される。依拠した図像の選択にもよるのだろう。神奈川県横須賀市の清雲寺像

（中国・南宋）をはじめ、滝見観音と呼ばれる事例も少なくない。

像内納入品は当初のものか否か不明だが、像底から内刳を深く施す構造は当初の仕様と思われ、その意味では現在の納入品が造像時以来のものである可能性も残されよう。そうでないにしても、当初から納入品は用意されていたものと思われる。将来の保存修理の際の確認が待たれよう。

表面の漆箔は後補であるが、このために眼窩が少し狭められており、表情を損ねる結果となっているようである。本来はもう少し見ひらきがあり、かつ目尻ももっと切れ長で、より理知的な顔貌であったかと想像する。

制作年代であるが、とくに側面観に見る自然な身のかまえや、整理されつつもやはり自然な感を失わない衣文の彫法は、鎌倉時代の制作にかかることを推測させる。複雑な髪筋を丁寧に表現する点、やや面ながで下ぶくれの顔立ちなどを考慮すれば、鎌倉時代後期（十三世紀後半）もやや降った頃の造立かと考える。その場合、応安五年（一三七二）の乗光寺の開基を約百年さかのぼり、他からの移座ということとなるが、詳しい経緯は不詳である。

（いわた　しげき／奈良国立博物館学芸部上席研究員）

註

（1）乗光寺梵鐘銘（享保九年：一七二四）、享保十一年十一月生土村寺社地書上帳控など。

（2）宝暦五年雲居山乗光寺記録。

（3）浅見龍介『禅宗の彫刻』（『日本の美術』五〇七、二〇〇八年、至文堂）など。

（4）調査は二〇一八年二月二十二・二十三日に実施した。参加者は奈良国立博物館の岩井共二・鳥越俊行・山口隆介・佐々木香輔の各氏と筆者。口絵・挿図写真の撮影は佐々木氏（X線透過画像を除く）。

（5）その他の法量は次のとおり。単位cm。

髪際高　四一・三　　坐　高　三八・四　　髪際坐高　二九・九
頂－顎　一六・四　　面　長　七・三　　面　幅　五・四
面　奥　七・八　　耳　張　八・一　　胸奥（左）　八・八
胸奥（右）八・六　　腹　奥　一〇・一　　肘　張　二〇・五
膝　張　二二・五　　坐　奥　一六・八　　膝高（左）　五・九
膝高（右）五・三　　右足垂下部長　一一・四

（6）撮影は鳥越俊行氏による。画像の解釈についても同氏の教示を得た。

（7）極楽寺像の存在については、武田和昭氏のご教示を得た。山口県教育委員会『未指定文化財総合調査報告書　彫刻編』（一九八三年）収載。

奈良国立博物館研究紀要
鹿園雜集　第二十一号
平成三十一年四月三十日発行
編集発行　奈良国立博物館
〒六三〇-八二一三
奈良市登大路町五〇番地
印刷・製本　株式会社天理時報社
天理市稲葉町八〇番地